

たかしくんの1(いち)

依田 茂夫

「たかしくん」の一部始終を聞いたのは、仕事がすみ職員室へ帰ったことだった。相談室の係を割り当てられ、若い母親たちの素朴な疑問や戸惑いにひとつひとつ応えていた明子は、後片付けがどの係よりもおそくなってしまうた。

就学児検診という子どもはもちろん親たちまで緊張のしつ放したが、検査する側にとっても気骨の折れるものである。ほとんどの子が幼稚園や保育所を経験しているとはいえ、見知らぬ場所、大勢の人におびえて泣きだす子、おしっこを漏らす子が必ずいる。それぐらいのことなら慣れつこの先生たちでも、たかしくんは別格だったらしい。

新就学児たちは付き添いの親の手を離れ、数人ずつひと組になって六年生の女子に引率され検査室へ行く。ところが「さあ、行きますよ」と、おねえさんに促されても、たかしくんひとりだけが席を起たなかった。

「たかし、行くだよ」

母親を困らせているところへ、さいわい近所で時折面倒見てもらっている女の子が連れに来てくれて、ふくれっ面の彼はやつと廊下へ出たのである。

機嫌がわるいところへもってきて、最初に内科検診だったのがまずかった。お医者さんが大キライなたかしくんは、椅子からずっこけてしまった。看護婦さんがさかんにあや

<小説>

<たかしくんの1(いち)>

してくれるのだが、顔を真っ赤にして抵抗する。

身長計にも体重計にも乗ろうとしなかった。捕まえようとする「ウツ、ウツ、ウツ、ウツ・・・」けだものの子みたいにへんなうなり声をあげてあげられるのである。始末に困った係の先生が引率の六年生を控室へやり、母親に来てもらった。それでやっと、内科の検診と身体測定を終えたのだった。

耳鼻科、歯科は無難に切り抜けた。親に抱っこされた彼を、ほかの子が怪訝に眺めている。同じ保育所の子がたかしくんを突つきにくる。そのときだけは彼もニヤツとするが、すぐまたむずかしい顔にもどってしまう。

視力検査室ではとうとう横を向いたきり係の先生を無視した。知能検査は始めるより先にあばれていた。母親の手をふり切ってひっくり返り、あたりかまわずあわあ大声をあげた。泣くというよりわめくのだ。席へ着かせることもできない。どうにも手がつかず、たかしくんだけ入学後折を見て検査しようということなのである。

新就学児童の受け入れ準備に区切りがつけば、たちまち学年末だった。終業式のあと、生徒たちが皆帰っても職員室は慌ただしい。毎年のことながら、かねて取り沙汰され

ていた職員が一人また一人校長室へ呼ばれるたび、声にはださなくともどよめきに似た空気が室内をかき乱す。希望した通りの異動内示が与えられ、笑いかみ殺しながらもどってくる者がいる反面、顔面蒼白、机へ突っ伏し、慰めの言葉もはばかられるようなありさまの人もまま見られる。このひととき、異動の対象になろうとなるまいと、それぞれじつとしていられない気分を感じるのが常である。

大方の内示が一段落したころになって、校長室へちよつとご足労願いますという校長からの伝言だった。身に覚えのない明子は、いまごろなんだろうと不審におもいながら校長室のドアをノックした。

「実はですね、早速新年度の人事ですが、山崎先生に新一年の主任をお願いしたいですが・・・」

終業式当日、新年度の校内人事が申し渡されるのは異例である。明子はピンときた。校長は表向きの理由しか口にしたいが、たかしくんのからんでいることが確実だった。

新一年生は四つの学級に分けられ、すでにクラス名簿もでき上がっている。問題児のたかしくんは一組だった。問題児といえばさまざまであるが、たかしくんの場合はいわゆる知恵遅れだということを、職員全員が知っていた。一組の担任は学年主任を兼ねるのが慣例である。だれにその

白羽の矢が立つか、職員一同関心の的だった。明子もついこの間までは、自分のクラスのみに集中していればよい立場であったが、ここ数年、主任役に就いた途端、さまざまな仕事がかぶさってきて滅法いそがしい。この年度末をもって退職する人がいたため、明子はいかに校内女性教諭中の最年長者になってしまった。肩にかかる荷の重さを考えるとここらあたりが潮時、教職生活に見切りをつける目論みがあっただけに、しまった、とおもわぬでもない。

たかしくんのような子は、いくら活気や馬力があっても、若い人にまかせるのは心もとない。年期の入った指導力ある人を起用したい、というのが校長の肚であって、決して年長者だからいやな役をも引き受ける、と押しつけられたわけではない。明子の力量は同僚たちが認めていたし、自分自身三十年の経歴をふり返って、特種な子の扱いにそこそこの自信はある。

一晚考えさせてもらいたいと即答は避けたが、拒否するわけにもいかない覚悟はできていた。校長の信頼がむしろ恨めしい。しかしこの一年、年かさ教員の意地を見せ、見事にやり通したならば、来年三月退職のふんぎりがつけられるにちがいないとおもっていた。

遊園地で遊んでるようなさわぎだった。やれやれ、これじゃ寝もなにもあったもんじゃやない、とむかむかしてくる。道子ちゃんと美恵ちゃんが床を拭いといってくれたので褒めてやった。褒めついでにたかしくんの机の片付けを手伝ってもらい、間もなくやって来た母親と帰るたかしくんを、中庭へでて見送ってやる。

次の朝、職員朝礼開始に七、八分ゆとりがあったので職員室を離れた。昇降口のところを通るとクラスの子四人がもめている。体の小さなたかしくんを三人が取り囲んでいた。

「せんせい、たかしくんはクツをぬがないんだってッ」
里吉くんが怒っていた。のりゆきくんも頬を真っ赤にふくらませているし、道子ちゃんはいまにも泣きだしそうだった。

「あら、そう。たかしくん、上履きに替えましようね」
やさしく諭されても、かれは口をへの字にむすんだままである。仕方なくわきの台へかけさせクツをぬがせてやると、意外にあばれもせず上履きをはいた。

一校時、国語の時間である。生徒たちがそれぞれのロッカーから教科書やノートを持ってきて勉強の用意をする。たかしくんだけはお友だちがなにをしようと、どこ吹く風

「せんせい、たかしくんがー・・・」

道子ちゃんが悲鳴をあげた。顔をしかめ隣の子へくちびるをとがらせている。たかしくんが机へしがみついていた。腰掛けからポタポタしずくが滴り落ち、床がぬれるのを周りの子たちがベソかき顔で眺めている。

あらあら、だからさつき、おしっこ行こうよって言ったのに。

休み時間、かれをトイレへ連れて行こうとしたら、「いやーッ」とだだをこねたのだ。

とりあえず汚した床へ雑巾をかぶせ、たかしくんを保健室へ抱いて行ってズボンとパンツを脱がせた。パンツの予備はあるがズボンの替わりがない。あと三十分もすれば給食の時間になり、食べてしまえば一年生は下校だった。

「困っちゃったね、おうちへ帰ろうか」

「うん」たかしくんは涼しい顔である。

電話したら折よく母親が家にいた。わけを話し迎えに来てくれるよう頼む。ズボンのおしっこを乾いたタオルの手ぬぐいに吸い取らせ、もう一枚をパンツの間へはさんではかせてやる。

教室へ取って返すと、子どもたちがでんでんばらばら、

だった。明子に「持っておいで」と言いつけられると席は立つが、そのへんをぶらぶらしてて容易に目的がはたせない。けつきよく明子がいつしよに行ってロッカーを開けてやらねばならなくなる。

しかし、それで文字の練習が始められるわけではない。ノートを開いてもエンピツをにぎらないのである。手を取ってたかしの(た)を教えてやったのに、すごいやになってエンピツを放りだし、起ったり坐ったり、そわそわばかりしている。

「どうしたの、おしっこしたいの」

ちがう、というふうには地団駄を踏む。昨日のおもらしで懲りているから反応を鵜呑みにはできない。ふて腐れているのを抱き上げ、ドアの外へ出した。

「さあ、トイレ行ってきなさい。わかるでしょう」

背中をポンとたたいてやると、たかしくんは馬がはねるような格好で廊下を横つとびして行った。

生徒たちは「あッ、ちがった」などと頓狂な声をあげたりして、隣の子の手もとと見較べながら黒板に書かれた八あいさつV/AふれあいVの文字を練習している。まがったり形がうまく取れない子へは赤いサインペンで直して歩くのだが、一年生の席へ屈むのは結構つらいのである。痛む

腰を伸ばそうと反り返った耳にチラッと、うなり声らしいものが入った。はて？ ドアへ目をやったのと、ノックされるのが同時だった。二組の守山先生のしかめ顔のぞいた。

「山崎先生、たかしくんが・・・」

皆まで聞かず、教室をとび出した。二組と三組の境目でたかしくんがズボンの前を押さえ、ウオー、ウオー、跳ねまわっている。三組の担任、子どもたちも窓から首をのぞかせていた。

「なにしているのよッ、早くトイレ行きなさいッ」

若い先生が見ているとおもうと、つい語気が荒くなった。恥ずかしさで顔が火を噴きそうだった。たかしくんを横抱えにしてトイレへ運び、便器へ向けて立たしてやる。放尿が始まったのを見とどけ、教室へ引き返した。

「せんせい、たかしくんは？」

道子ちゃんが心配げな眼差しを上げる。

「だいじょうぶよ、今度は」

しかしかれは一向に姿を現さない。明子はまたトイレへ走った。

いたいた。手洗い場のありつたけの蛇口を出し放しにして、とび散る飛沫を浴び、踊り狂っていた。

「こらッ」

怒鳴りつけると、さしものたかしくんが立ちすくんだ。叱るところではない。夢中で蛇口を閉め、ずぶ濡れのたかしくんをつるし上げた。

今年かぎりで辞める決意をかため、それとなく校長に持ちかけたのが昨年の秋、あと二、三日で立冬のころだった。教壇に未練がないといえはウソになるし、情熱が失せたわけでもない。が、とにかく疲れる。家に着くともうぐつたりしてしまい、ひとしきりソファへ横にならなければ夕飯の支度にかかれぬほどである。突然目がまわり、救急車を依頼したこともあった。診察してもらうと、低血圧気味だったはずが、なんと高血圧の症状に変化していた。

更年期障害の仕業かもしれない。いくつもの役を背負いすぎたためもある。いずれにしても、もうもう若くはない。体力気力を根こそぎつかい果たし、どうしようもないバアさんなどと陰口されないうち、惜しまれて退きたいとおもう。ただ、息子たちがまだ大学を卒えていないのが難点だった。毎月の仕送りは莫大である。いまここで辞めたとして、年金が全額支給されるのは十年も先のことだ。老後を考え、退職金をなるべく残しておきたいし、とするとて

き面に家計へひびいてくる。

夫にもこの正月休みに相談したのだが、にべもなくはねつけられてしまった。次男が卒業するまではダメだというのである。なんとという情のない人だろうか。ものの言い方もあるだろうに。

最近血圧の高いことは、彼も救急車へ付き添ったぐらいだから充分わかっているはずである。一番の原因(もと)は過労なのだ。体をわるくしてからではつまらないので、思い切りよく退職金を生活費にあててもいいと言ったのだが、「ダメだ」の一点張りで取りつく島もない。決して冷たい人ではなかったのに、なにが夫を意固地にさせているのか、つくづく情けなくなった。

ことによると、まだあの人と・・・
疑えば自分も疵つく。でも疑わずにいられなかった。

へんな女といっしょだったと、一度だけならまだしも、二人もの親しい友人に告げ口され、うちの人に限ってとか、冗談にまぎらしはしたが、内心穏やかでいられなかった。二人の話をつき混ぜると、いつか街で出会って夫から紹介された女にちがいない。これまで女のまちはいはおろか、うわさすら薬にしたくもなかったほどだし、謙一郎は理性の勝った人だ、絶対過ちを犯さない人だと心から信じてい

たのだが。

同僚とかあるいは同級生、後輩だという女性に引き合わされた経験が皆無ではないが、それらの人たちにいやな感情を抱いた覚えなどなかった。なのにその女の場合は会った途端、心臓を素手で掴まれたような痛みを感じたものである。先方が若かったことばかりが理由ではない。女のカン、としか言いようがないのである。

土曜日の午後だった。買い物途中たまたま繁華街を歩いていたら、道路向かい側の喫茶店を出てくる二人を目撃した。呼吸が止まり、目の前が真っ暗になった。あんなに満ち足りた笑顔の夫を久しく見たことがない。

女の、ことさら媚を売ろうとするしぐさがいやらしかった。夜分裏通りの小料理屋からこっそり現れたのちがいが、ま夏の日差しがあり余るほどの午後、しかも人目につきやすい場所である。なにも聞かされていなかったならば、あるいは平静でいられたかもしれないが、まさかとおもうものの疑いが芽生えていた折が折だけに、浮気の現場を見せつけられたような気がして、ついわれを忘れた。

横断歩道でもないところを無意識に突つきり、ふらふら近づいて行った。明子に気がついた瞬間、蒼ざめた謙一郎の表情がただごとではない。

咄嗟にかれはなに食わぬふうをよそおい、「じゃあ」と女に右手を上げた。女は右へ、彼はその場へ立ち止まる。面識があるはずなのに、明子とはつきり目を合わせながら会釈するでもなく、女はしばらく行つてからわざとふり返つた。蔑むような、冷やかすような目つきに、明子は気が遠くなりそうだった。

「やあ、どうしたんだ」

取つてつけたような笑いを浮かべ、寄ってくる夫へは一瞥をくれただけで背を向け、小走りに走つた。ただただ夫のもとを離れたかった。

一週間ばかりは、夫の顔を見るさえおぞましかった。鼻持ちならぬ不潔臭が彼の全身にただよい、うっかり触れたらあの女の体臭に汚されそうな気さえした。

謙一郎は一言の弁解もしない。明子も意地になつて、絶対にたずねたりしまいとおもつた。へたになじつたりすると、きつと開き直る人なのだ。迂闊にものを言つたらこちらの敗けである。

けれども、日がたつにつれ、言い訳してくればいいのに、と夫が口を切るのを待ち望んでいることに気がつき、くやしくなった。

このまま見すごしていいものか。なんでもなければ悩む

イホーム・パパ、共働きの夫としてはまあ、優等生である。子育てに追われていたころは、子ども中心の団欒のときを忘れるぐらいだった。それが、とかく夫の存在をうっかりし勝ちになったのは、やはり息子たちの受験期にふり回され、そちらへばかり気を奪られてたせいかもしれない。

ほんとは、だれよりも気遣わねばならない人なのに、放つといつても自分のことは自分で始末するし、食べ物に好ききらいがあるわけでもない。世話の焼けないのが盲点だったにちがいない。手抜きされても不満を表に現さない彼も、内心は寂しかったのだろうか。それをおもつと、折角の休日、美術館や音楽会へ誘われたのに気ぜわしさにかけ、付き合つたてやらなかつことが悔やまれる。

なにげないひと言がきっかけで、うわべはつくろえたのだが、どうしても気まずい気分が夫との間に横たわつた。

彼の帰りが遅い夜は、つまらぬ妄想に苦しめられた。そうこうするうち謙一郎にも彼なりの考えがあつたらしく、異動希望を提出したのが通り、さつさと転任してしまつた。管理職登用の声がかかるかもしれない大切な時期にもかかわらず、女と同じ職場を去つてくれたことで、明子はようやく愁眉を開いた。きつとわたしの気持ちを察してくれただとおもい、夫への信頼が甦つたのだった。

だけバカらしいが、棄ておいてもし、女と抜き差しならぬ深みにはまりでもしたらどうしよう。思案しても途方に暮れるばかりだった。

以来、謙一郎と言葉らしい言葉を交わしていない。もの言わぬ夫に不安がつゆる。あの満足そうな彼の笑みと、女のしたり顔がべつとり脳裡へ焼きつき、明子の心をかきむしつた。

「夏休みだな、俊夫は帰ってくるのかね。アルバイトならこつちでもやれるだろうが」

右手にビールのコップを、左手で夕刊を広げていた謙一郎の口がぼつりと開いた。

唐突にたずねられ、驚くよりホツとした。

「さあ、なんにも聞いてないけど」

「そうか」なにかモゴモゴつぶやいた夫は、片手で夕刊を器用にたたみ、ビールの残りを一息に干すと茶わんを差しだした。明子はご飯をよそい、お茶を淹れに起つた。

わたしたちはしつくりいつたのかしら。

かつて夫婦仲をどうのと気にしたこともない。これという深刻な諍いがなかった。謙一郎は手前勝手に気短な性分だが、逆らいさえしなければ結構思いやり深いほうだし、掃除でもお子守でもいやがらずやつてくれた。典型的なマ

しかし、ここへ来て退職の相談を冷たくあしらわれたとなると、またはや疑念が生じてくるのである。隠れて女と逢つている気配は感じられないが、体よく騙されているのではという危惧につきまとわれた。

銀婚の年を迎えた夫婦でありながら、一体どれが真実の夫なのかわからなくなった。単純なようで複雑で、ずぼらかとおもえばいやに几帳面なところもあつたりして。慣れつこのはずがいやに気になる。

堅いとばかり信じていた人柄でも、男と女のこととは別ものだ、などと聞く。ならばどうしたらよいか。焦つても日々の忙しさを脱げられない、仕事を放りだしてまで夫に尽くすわけにいかない明子は、夜中にふつと目を覚まし、考え込んで眠れなくなることがたびたびだった。

☆音がくのべんきょうをしたといいました。たのしかったです。あしたから日記をかくといいました。あたしもほんとにうれいす☆

家庭連絡帳へ書いて寄越した母親の、幼児のような稚拙な文字を見て、たかしくんの知恵遅れは生まれる前からの約束ごとだったかという気さえする。でもへたくそながら、

わが子の成長を喜ぶ母親の気持ちがあみ取れた。生徒たちは登校するとまっ先に色とりどりの肩かけバッグから連絡帳を取りだし、明子のところへ持つてくる。今日給食費を持たせましたとか、かぜ気味ですのでよろしくといった連絡のほかに、子どもについてのさまざまな悩み、問い合わせ、感想などが記してあった。明子も丹念に返事やらこまごました注意を書き、下校のとき返すのである。授業の合間のわずかなすきを盗み、必死に書くのだが、ぜんぶは書き終えられなくて家に持ち帰ることもしよつちゅうである。

たかしくんは催促したぐらいではバッグを開けなかった。明子がわざわざ席へ足を運び、だましましお願ひして開けさせるのである。このごろはやつと「はい連絡帳」と手を出せば渡してくれるようになったが。

♪ おおきなくりのきのしたで・・・

昨日の三校時は音楽の授業だった。みんな子つばめのように大きな口を開けうたっているのに、たかしくんは口まねすらしなかった。

横を見、うしろを向き、不意に奇声を発し、平手で机を

か成長したわが子に目を見張り、安堵することやら、親心がひしひし伝わってくる。しかし、甘い期待をそのままにしておいても本人や親のためにはならない、心を鬼にしてありのままを知らせねばならなかった。

☆・・・ところでたかしくんは、まだお友だちといっしょのお勉強がむずかしいようです。本やノートを出しなさいと言っても出しません。わたしがロッカーへついで行つて出してやるのです。字を教えようとしても言うことをきいてくれません。押しつけるとむきになって怒りますもうすこし様子を見て、じつくりやらせようとおもいます・・・☆

かなり控えめに書いたつもりだが、母親のがっかりする姿が目につく。父親も連絡帳を読んでもくれるだろうか。居酒屋で働く父親は帰宅が深夜、というより夜明けといったが早いぐらいで、昼間は蒲団へもぐりつきりだから子どもとすれちがいの生活である。たかしくんの下に二人の子がいて、一人はまだ満一歳にならない暮らしぶりを想像するに、たいへんだなどという月並みな表現ではとても収まらない。明子はバッグを肩にするたかしくんのこれからを

たいたり足をバタつかせて皆のじゃまをした。歌の輪に溶け込んでいたとも見えなかったが、それが彼の楽しさの現れだったと母親の記述からわかり、明子は連絡帳をもう一度読みなおすと涙ぐんでしまった。だが、日記をかく・・・、となると・・・。

とつくに文字を覚えてしまった子もいて、ただたどしい日記を誇らしげな笑顔で見せにくる。正しいとはいえない言葉遣いや、漢字も自己流の書き順が身についていると矯正に苦労するのだが、それをむりになおして意欲をくじいたら元も子もない、一応褒めといて指導の機会を待つのである。たかしくんも、そういうお友だちがうらやましくなったのかもしれないが、かれにはまだ、一字も書けないのだ。

☆お便り拝見しました。楽しいお勉強ができてほんとうによかったですね。たかしくんは、おうちでは、お母さんとよくお話しするようですが、わたしにはなんにも話してくれません。もつとお話したいなあと思います・・・☆

たかしくんがどんな子か、親にはわかつているはずである。もし一行でも日記を書くことができたなら、どんなに

考え、胸が痛んでならなかった。

まさか連絡帳がもとはあるまいが、たかしくんは翌日から二日続けて欠席した。里吉くんが預かってきた連絡帳には、カゼをひいたためとあったが、明子にはただでさえ気まぐれなたかしくんが「がっこう、いかないッ」とかふん反り返っているように想像されてならなかった。今朝、もし来なかったら家庭訪問するつもりでいたところ、上級生に手を引かれ、校門をくぐるたかしくんが窓から見えた。ああよかったと胸をなでおろしはしたが、教室へ入ってみるといつもよりもつと、かれが落ち着かずいらしているのが不安でならなかった。

二校時が体育だった。すがすがしい初夏の太陽のもと、カセットテープの音楽に合わせラジオ体操をした。ギクシヤクシヤした動作の子がいなくてもいいが、みんなうまくりリズムに乗れるようになった。たかしくんだけが例外である。目を離すと列はずれ、どこへでもすつ飛んでしまう。

その度に「あーッ」と叫び声上がる。捕まえてもとの位置に並べてもぜんぜん辛抱ができない。明子が連れに行くなら割合おとなしく手を引かれてくるのだが、里吉くんを増田くんをやつたらグラウンドの端から端へ逃げ回った。手を取ろうとすると歯をむき出して脅したりする。

時間を見計らい、生徒たちを中へ入れた。着替えと手洗いをすませ教室へ向かうと、なにやらざわめいている。ドアを乗りだしていた道子ちゃんが駆けて来た。

「あのねー、あのねー、たかしくんがねー・・・」
息はずませている。

「たかしくんがねー、おうちへかえるんだってえー。あばれてるよー」
なるほど、ウォー、ウォー、例のごとくわめいている。床にひっくり返っていた。里吉くんたちが三人がかりで起こそうとするが、そうはさせまいと手足をバタつかせている。

「たいいくぎを着かえさせてやろうとしたの」
「あらあ、道子ちゃんが」
「うん、美恵ちゃんとゆかりちゃんと・・・」
「したら「いやだッ、おうちかえるう」あばれて着替えてようとなないので、男の子たちが加勢してくれた。するとますます怒ってしまった。

「たかしくん、いけません。お勉強するんですよ」
近ごろはだいぶ素直になったのだが、よほど虫の居所がわるかったのか、「おうちかえる」を言い張り、ついに三校時は授業にならなかった。一向に機嫌がなおらない彼に

一計を案じ「給食はカレーだよ」耳打ちしたら、掌を返したようににこにこし始めた。

「ね、明日の朝、たかしくんちへ寄って連れて来てくれない」

放課後、帰り支度の里吉くと道子ちゃんにそっと頼んだ。

「うん、いいよ」

「はい」

二人とも目を輝かした。たかしくんの世話を頼まれて、急に大人びた顔になった。

次の朝、明子は昇降口にたたずみ、いまかいまかと気をもんでいた。

小学生の登校はグループごとに時間がびたりときまっている。それが今朝は、いつもの順番どおりに待つ子がやってこないのである。ことによるとたかしくんがグズっているのかもしれない。そうおもい背伸びしたとき、花壇の間を酔っぱらいのようにぐでんぐでん歩いているたかしくんが目にとまった。道子ちゃん、里吉くん、方面ちがいの子までつながってやってくる。

明子は伸び上がって手を振った。子どもたちも気づき一

斉にかわいらしい手を振る。たかしくんのみ面白くなさそうだった。

「おはようございまーす」
かん高い声が校舎に跳ね返る。呆気にとられたたかしくんは、だれの手も借りずにクツをぬぎ、上履きに履き替えた。

「おはよう。みんな元気ねえ・・・たかしくんおはよう。よく来たよく来た」
頭をなでてやろうとした手で、明子はひよいとたかしくんを抱っこしてしまった。

「あれえ、たかしくんはいいなあ」
しっかりとるようでも、ほんとは甘えっ子の里吉くんがよだれをたらしそうな表情をした。

いいなあ、いいなあ・・・どの子も自分が抱っこしてもらいたいのか、明子の腰にまつわりつく。

たかしくんはいいなあッ、たかしくんはいいなあッ・・・
いいいな、いいいな合唱になった。よそのクラスの子たちがもの珍しそうに眺めている。たかしくんはニコリとせず、それでも満更わるくはないといった顔だった。

特殊教育担当の向原先生をお願いして、のびのびになっていたたかしくんの知能検査を実施することになった。

先生方はご遠慮くださいとのことなので職員室へこもっていたが、どうしても落ち着いていられない。忍び足してドアへ指をこじ入れ、中をうかがうとたかしくんがしきりにしゃべっている。明子はすっかり感心し、ちよっぴり妬ましくもなった。

自分だけでなく彼は心を開いてくれると、ひそかに自負していたのである。お父さんにはなんにも言わないけれど、あたしには学校のことたくさん教えてくれます、と話していた母親の言葉に思い当たる。

検査終了後の懇談で明子はのぞき見した非礼を詫び、驚きを率直に述べた。

「そうですね、こういう子は意志伝達の方法が極端に未分化でして、六歳児にふさわしい表現を持たないわけです。自分の意志、意図が相手に伝わってないことは本能的に察知しますので、じれったさもありますし警戒心が強くなって殻に閉じこもります。その殻をわずかも破って正直な姿を見させてもらうには、本人と同じレベルへこちらの身を縮め、粘り強く言い分をきいてやるのが大事ですね。一対一ならばともかく、集団の中でこの子を理解しようと

すると無理が生じます」

知恵遅れの子を扱い慣れた向原先生は、さして疲れた様子もなく語った。

「実は、この子に手がかかりすぎまして・・・」

お友だちがよく面倒みてくれまして助かるんですが、本人も喜んでますが、やはりあの子にかかり切りなもので、ほかの子の指導がおろそかになってしまします。それでもまだ、たかしくんは一文字も書けません。このままですと全員の勉強が遅れますし、はたして本人のためになるものか、疑問におもうんです」

明子は校長の了解を得、特殊学校への転校をすすめるべきか悩んでいた。それはたいへん勇気のいることなのだ。たとえ専門家や上司の同意を得たにしても、普通児として扱ってもらいたい親の気持ちを踏みにじるおそれがある。「まあ、総合的に判断しまして、たかしくんの知能は三歳児がやつとところでしょうか。単純作業ならある程度熱中できる反面、抽象的な理解力はゼロに等しいですね。たとえば数の概念などまるきりできておりません。一年生にふさわしい学習はとも困難です。遊びを中心とした、保育園児並の扱いが必要でしょう。担任の先生はご苦労ですが」

学年の進行につれ、たかしくんが他人と自分との相違に気づき、違和感、疎外感に陥らなければよいが、とのことだった。

明子は、この際向原先生から、特殊学校行きを検討を校長に進言してもらいたかった。現状のまま、たかしくん、生徒たち、自分自身をふくめ共倒れしないうまい方法があるのか疑問だった。

たかしくんの知能が指数化されたからといって、指導法が変わってくるはずもない。彼が必要としているのは、正しい知識を身につけ、つききりで世話したり、適した勉強をさせてくれる人なのだ。

引き続き持たれた校内研究会でも、たかしくんが重要な話題になった。明子は勇気をふるい、言いにくいことですがと前置きし、たかしくんには特別な施設と教育が妥当ではないでしょうか、今ただちに結論を出そうとは思いますが、研究課題にしていただけでしたら、と感じているまを打ち明けた。

若い男性教諭が早速手をあげた。

「ぼくは反対だな。遅進児も障害児も平等に生きる権利を有します。同一の世界で生きられるよう配慮するのがわれわれの義務です。特別な施設つてのは、つまり差別するこ

<たかしくんの1(いち)>

とじゃないですか。知恵遅れだからって差別つけるのは人権問題だな。子どもたちにはですね、そういう障害をもった子がいることを、認識させてですね、そういう子も仲間の一員であることを・・・」

次第に口調が、学生活動家の演説に似てきた。年長者の意見に反論する礼儀、節度を弁えぬ若い世代が腹立たしい(なによ、あなたの授業。わあわあガタガタさせつ放しでさ、しつけもなにもなってないじゃないの。あれが授業つていえるの。なんなら、あなたのクラスへたかしくん預かってくれる?)一発食らわせない気分である。しかし、彼の意見にうなずく人もいた。

「さあ、差別でしょうか。理屈で教育は成り立たないとおもいますけど。」

それはともかく、わたくしももうトシです。ことによると来年三月、辞めるかもしれません。そうになったら、どなたかにあとを引き受けていただかねばなりませんね。どなたがおやりになるにしても、ご苦労の大きさを考えてしまいます。分担して仕事をする、といった性質のものじゃありませんから」

大人気ないが、皮肉と脅しを込め若い後輩教師を見やると、彼はムスツとして下を向いてしまった。

たかしくんのは結論どころか、これという議論の進展を見ないまま研究会を終わった。帰り道、夕飯などの買い物がかさ張って重い自転車を引き、県道から車の通らないわき道へそれた。

うしろに足音がする。追い越して行った中年男性の体つきや歩き方が謙一郎にそっくりだった。あれッ、と足を止め、苦笑いして見送る。背中がいやに怪しかった。

わけもわからず心が揺らめく。

どこの人だろう。奥さんいないのかしら。アパートに住む単身赴任の人かもしれない。夫の背を上げしげ眺めたためしはないが、もしかしたらこんなふうには怪しもうに裏通りを歩いてやしないか・・・

やっぱり来年三月かぎりまで退職しよう。俊夫が卒業だから仕送りは弘ひとりになる。おとうさんがこだわるのはお金のことばかりじゃないとおもう。肚を割ってよく話合わなくっちゃ。

なんにも得るところのない研究会だった。疲れたせいが無性に夫のいたわりが欲しかった。もし謙一郎がこんな立場だったら、わたしに慰めてもらいたたいとおもうにちがいない。夫婦は一心同体というではないか。永い間に培われ

<小説>

た夫婦の絆が、たかが女ひとりのためにボロボロになってしまふほど脆いものであるはずがない。意地を張らず、素直に今の気持ち打ち明ければ、謙一郎だつてきつと納得してくれるにちがいない。

一筋縄でいかないたかしくんだが、この一年、精一杯手を尽くしたら親もきつと気持ちをわかってくれるだろう。教員になれてよかった。子育ての喜びも味わった。いまはしみじみ妻でありたい。明子はしきりに合点の首をふつた。

梅雨入りがこれからだというのに、真夏のような暑さが襲つて来た。明子は暑いのがことのほか苦手であるが、子どもたちは汗びつしよりでも平気である。

みんなが色紙を折り、画用紙を切つて色を塗り、大はしやぎだった。図工の時間である。花の形をした壁かけ飾りがつくられていく。

たかしくんも明子がふち取りしてやった図柄に花びらを張りつけた。花心へにこにこマークの顔が描いてある。ひまわりの花だ。

仕上がった子は得意そうに明子の席へ持つてくるので、お友だちに披露してやる。たかしくんも持つて来た。

「たかしくんのお花ですよー、みんな見てえー」

「あッ、うまいなあ」すかさず、声が上がった。ほんた、うまいや。すごいなあ。パチパチパチ・・・拍手が鳴る。たかしくんはもじもじしている。

給食を彼はもりもり食べた。ご飯が足りなくてお代わりをした。お花の飾りを褒めてもらえ、気をよくしたらうれしい。食べ終わるとお帰りの準備である。そうだ、今日はひとつたかしくんを、と思立った。

「たかしくん、ねえ、先生とお勉強しようか」
「うん」

たかしくんが、いつになくやる気満々である。

「里吉くん、たかしくんは残つてお勉強してくからね。これ、おうちへとどけてくれない」

連絡帳へ(二十分ばかりお勉強してから帰します。送つていきますので心配しないでください)と走り書きし、里吉くんに渡した。

「さあーて、なにしようかね。そうだ、1を書いてみよう」

ざら紙に粗いマス目を引き、太いサインペンをにぎらせ

た。 「はい、こう書くんだよ」

たかしくんは目玉をグリグリさせ、明子の手もとをじつ

と見つめている。

「じゃ、書いてごらん」

クッ、クッ、クッ・・・ペンがざら紙をきしる。勢い余つてマスからはみ出てしまった。

「おやおや、このへんで止めるのよ。さあ、もう一度、はい」

ざら紙を新しくしてやり、再挑戦である。はじめは慎重だった。ツ、ツ、ツ、加速がつく。

「とまれえーッ！」

思わず大きな声になった。たかしくんはビクツとしてサインペンを紙から離れた。ちゃんと1らしい格好ができて

いる。
「やあー、書けた書けた。たかしくん、ほら、1が書けたよ。お利口ねえ、いい子いい子」 明子は彼を抱きしめた。たかしくんは顔をくしゃくしゃにし、ぐすんと鼻をすすつた。